

徳川齊昭と伊達宗城(十)

—— 菊池為三郎重善関係史料 ——

河 内 八 郎

前号まで全一〇回にわたり、弘化三（一八四六）年から、安政五（一八五八）年の通商条約調印前後の緊迫した状況下に至る、水戸徳川家と宇和島伊達家の相互の関係史料をまとめて来た。本号は、それらの「補遺」として、まず、両家両藩にかかわる水戸藩士菊池為三郎重善の関係書状などをまとめるものである。

補遺(1) 菊池為三郎（重善）関係史料

水戸藩士菊池為三郎（三左衛門、重善）については、弘化四年九月の「二五」（第十二号(三)）の註①以来、数多くのところでふれて来た。水戸から宇和島に逃れ、長年にわたってかくまわれていた彼（変名多田慎之助）が、安政元年九月二十七日の、水戸藩からの命（十月三日に宇和島に届き、四日に同人に伝えられる）によって、十月初めに宇和島を発ち、江戸に戻り、十月二十八日に、江戸の伊達宗城のもとに謝礼に訪れていること、及び翌安政二年正月には江戸にあって、正月十八日に江戸広尾邸に先代宗紀に年頭の挨拶を行うなど、宇和島藩関係者と接触し、四月初

めに水戸へ帰国したことなどについては、第十八号内の「(参考資料)一一七」に触れた。

そもそも菊池が、正確に何時、どのような経緯で水戸を離れて宇和島に潜入したかについては、具体的な記録は無い。『藍山公伝記一』が、弘化元年五月六日の徳川斉昭の致仕謹慎(甲辰政変)と、その後の水戸藩内の斉昭派と反斉昭派の対立から、斉昭が宗城に身柄を託し、宇和島藩士吉見左膳のもとに、高島流(威遠流)砲術修業を願出た福井藩士多田某として、宇和島にかくまわれた、とするのに、一応従っておく。(前出「二五」註①)

本史料は、宇和島伊達家文書の「御重書 丙書翰三八」として収められている原本一四通であるが、他にこれらを全て筆写して一冊にまとめた稿本「菊池為三郎関係史料」がある。原本であるが、筆蹟から判断すると、菊池自身のものの他に、伊達宗城の筆になると考えられる写しもある。以下、内容から年代を推定し、その順に並べる。多分弘化元年のうちに水戸藩を離れてから、安政元年に宇和島を離れるまでの、菊池の行動の大筋をたどることができる。

内容の概略を記すと、まず、天保十五(弘化元)年五月六日の斉昭の致仕・謹慎処分後、水戸藩の家中・士民の展開した「雪冤運動」の中での菊池の動きから始まる。菊池が、同じ水戸藩士仲間の武藤子之次郎、梶安正(八次郎)らと、弘化二年二月に、前後して遠く紀州和歌山に至り、紀伊徳川家に歎願したことは知られている(『水戸藩史料』別記下、卷二十六)が、そのときの菊池自身の歎願書と考えられるものがここにある。さらに、その頃から一二年後にかけて、水戸藩江戸小石川・駒込両邸をめぐる動き、及び藩内反斉昭派の動きなどを探った報告などと考えられるものがあるが、これらは、菊池が身辺の危険から宇和島へ逃れるまでの間に、それらの情報を宇和島伊達家へ伝え、それが斉昭の身辺を案ずる伊達宗城への情報提供となったものであるう。

さらに、引続いている水戸藩内の対立への対処の問題がある。弘化元年十一月の斉昭謹慎解除後も引続いた三連枝後見体制をさらに廃止して、斉昭の国政(藩政)関与を回復させようとする斉昭支持派の幕閣など各方面への働きか

けの動きと、慶篤の一本立ちを「大義名分」として斉昭の影響を排し、藩政中枢を反斉昭派で固めていこうとする動きの対抗は、一層激しいものになっていった。弘化三〜四年から、嘉永二〜三年のものとされる菊池の書翰類は、菊池が荻信之介らとともに、まさにその真ただ中にあったことを示している。

そして、ようやく三連校の後見が解かれ、斉昭の藩政参与の復活するのが嘉永二年三月十三日であり、さらに阿部老中の了解とその介入によって、やっとのことで藩内の「肅正」の実現するのが嘉永四年から五年にかけてである。

これまでの書翰の中から、弘化〜嘉永の菊池について触れられているところを略記してみると、次のようになる。すなわち、弘化四年九〜十月〔第十二号三〕の「二五」・「二七」に少々病を得ていること、その年から翌嘉永元年にかけて、砲術修業などをしつつ「無異潜居」（同前の「三〇」・「第十三号四」の「三二」・「三六」・「三九」・「第十四号四」の「五三」など）、そして嘉永二年にも引続き「潜居」している旨が宗城から斉昭に知らされているが、（「第十五号内」の「六四」・「六九」、同年四月二十日の書翰〔六四〕では、斉昭が「会いたし」と述べている。

そしてここで特に注目すべきは、その間菊池為三郎が、宇和島から京都に出、さらに江戸まで戻って来ているという事実である。本号の「一四一」と「一四二」の二つの書翰（何れも伊達宗城宛）にその事実と、その間の経緯が記されている。斉昭の復権と水戸藩内の「除奸」運動の只中という背景、そして「一四一」によれば、宗城が参府で不在中、その了解なく、松根図書ら宇和島地元の主脳部の許可を得て、急拠京都に出、数日の内に江戸に潜入、宗城を訪ねていることが判明する。前後の事情から「嘉永三年」として、そこに入れた。

ところで、安政元年に江戸へ戻ってからの菊池の行動を具体的に示す記録は、この中には無いが、のち安政五〜六年「安政大獄」の相次ぐ「処分」の続く中で、安政六年十月二十九日、幕命によって、「役儀取放ち、百日押込」の

処分を受けている。同時に幕府の処分を受けた水戸藩士には、「水戸表永押込」が海保帆平・山国喜八郎・加藤木賞三の三名、「百日押込」が菊池の他に三木源八・荻信之介の二名で、計六名である。なおそれを受けた水戸藩内での処分は、御徒目付菊池為三郎は、「御役召放され、小普請組へ入れ、国元へ引越せ」ということであつた。

一三二、弘化元年十月十六日 徳川斉昭書翰（論書）写、国元宛

* 宇和島伊達文化保存会蔵、宇和島伊達家文書「御重書 丙御書翰」第三八号一九、状、これは伊達宗城の筆
『水戸藩史料』別記下、卷二十五、七百二十頁所引、但し「十月二十六日」付

御筆写

此度之参府者、何れ善事ニ者無之と竊推察し、兼而整置たる退隱之服迄持参、又被 仰出候次第より、血氣之者共出府、我等微忠之素心を歎訴可致歟とも豫め思ひ計られ、左候事ハ穩便ならざる而已ならず、宗室之尊意に悖り候事、御恐悚至極に候、依而發途節に至り、此度参府御用ハ難計候得共、如何様被 仰出候共素心不改、忠節を尽し候へハ不苦故、一切出府等致間敷旨書付遣置候所、如此退隱慎被 仰付候上ハ、敵命に従ひ奉り候こそ敬上之義故、慎居候事ニ候、其砌者國中静謐に候故、我等兼而申付候趣相守候事と安心致居候所、八月比ニ相成候てハ、何ともこらへ兼候哉、出府いたし、我等忠誠之赤心歎訴、慎ミ早く解候様致度趣、薄々相聞候故、又々書附を以相論候所者、定て心得居候半、然ルに、此度出国之者も有之歟ニ、薄々承り及候、存詰候余り、逆上も致候哉、難心得事ニ候、我等性来之赤心を歎訴致、一刻も早く慎の解、政事をも承り候様致度存候ハ、臣下たる者之素情尤至極、誰とても左様可有之候筈に候得共、是非之論ニ不及、長上之命令を守り候者、敬上之義ニ而、我等か主意ニ候、再三申達候上者、心得も有へき事故、此上一統心得違無之候様、兼而我等ニ申達候趣能々相守り、一切動揺致間敷事

右之趣、家中一統江も可申達也

十月十六日^⑤

御花押

両老共^⑥江

① 此度の参府^①弘化元(天保十五)年五月五日の斉昭の参府と、翌五月六日の致仕・謹慎処分

② 何ともこらへ兼ね出府^②斉昭の処分の後国元から「雪冤運動」のため統々と出府を始む。

③ 書附を以て相論す^③斉昭、国元の動搖の報により、八月十三日に、国元の諸職への鎮撫の論書を出す。その後も十月二十六日の再度の論書などあり。

④ 此度出国の者^④武田正生と吉成信貞が十月十三日に密かに水戸を發ち、十月十五日に江戸に潜入、十月二十日水野老中らを訪ねることになる件か。

⑤ 十月六日^⑤この水戸への論書は、『水戸藩史料』の引くように、「十月二十六日」付が正しい。

⑥ 両老^⑥国元水戸の城代鈴木石見守重矩、執政朝比奈弥太郎泰然、何れも門閥派。

内容 一、今回の出府は、不安なる事態の招来を予測せしも、予め国元の「血氣」の者を慰撫の上の出発なり

一、退隱処分時は、国元平靜で安堵せしも、八月ごろより動搖あり

一、斉昭、国元へ論書を送る

一、此度出国、雪冤の歎願ありと聞く

一、家臣の「素情」はもともと至極なるも、「我が主意」を守って平穩たるべし

一三三、弘化二年二月 菊池為三郎他一名歎願書(写)、紀伊徳川家宛

・宇和島伊達家文書、同前、第三八号一四、状、これは伊達宗城の筆

水戸中納言様御義、当十七ヶ年以前御家督以来、御国政向御丹誠被遊、質素儉約、文武御引立、農民御撫育、海防御手当等之義、篤く御世話被為在候ニ付、御家中一統学問・武芸相励ミ、私共之如キ愚昧之者迄、武術修行存分仕り、

徳川斉昭と伊達宗城出——河内

学校^②におゐて度々入 御覽、時々御褒美をも蒙り、〔難有仕合ニ奉存罷在候所、去五月中俄に御参府ニ而、御不慮之
 御災難を御受被遊候段、^③委細 御承知被遊候通ニ而、御家中ハ不及申上、郷中百姓迄少しく心ある者ハ、一統悲嘆慄
 慨仕候、乍併、御國中騒々敷御坐候而者、尚以御為不宜候ニ付、一統相憤罷在候得共、百日・百五十日を過候而も、
 御有免之御沙汰無御坐、御国向者次第々々に相崩れ候姿に罷成候ニ付、大御番頭武田彦九郎義ハ、御家中惣体ニ代り
 候心得、御郡奉行吉成又右衛門義ハ、農民共に代り候心得ニ而、出府仕り、^⑤公辺御老中方江嘆願申立、尚又御家
 中井農民共も、思ひ／＼に水戸表御家老をはじめ、御連枝方、尚又赤坂・市ヶ谷御屋形其外へ奉嘆願候事に御坐候、
 然ル所、十一月廿六日上使ヲ以、御慎御有免被 仰出候に付、一統一ト先奉恐悦候所、御連枝方御後見者元之通りニ
 而、其上 中納言様にハ、御政事へ御携り不被成候様、別段御沙汰被為 在候由、奉承知、一統尚々悲嘆仕候ニ付、
 水府表并ニ小石川御役人共より嚴重ニ取鎮、当春ニ至り候而ハ、郷士井農民とも之内、篤く 中納言様御義を奉慕
 候者共ハ、揚り屋入り、又は入牢に相成、御役人共之内、^⑥中納言様御風義ヲ相守り候者ハ、追々退役下転仕り、
 前書武田彦九郎・吉成又右衛門兩人ハ、去十月中より物頭共御預ニ而、今以嚴重之御手当ニ相成居候に仕、右彦九郎
 伴魁介、又右衛門伴恒次郎兩人、悲嘆に堪難く、一図に覚悟仕候と相見、兩人一同出府仕り、当正月廿八日、阿部伊
 勢守殿御宅江嘆訴仕候由、^⑦右兩人義ハ忠義孝兩様に拘り候義故、^⑧公辺へ奉嘆訴候も無扨義に奉存候得共、其外御
 家中之義ハ、去年中御慎ミの節共違ひ、只今と相成候而ハ、只御政事へ御携り有無之一条に御坐候間、又々 公辺
 へ相嘆キ候様にてハ恐入候間、御家中一同憤憤を忍び相慎ミ、乍恐 大納言様御参府ヲ頼ミに仕り、相樂ミ罷在候、
 仍而私共兩人愚考仕候所、御参府被遊候而も、御当坐者乍恐何角御混雜ニ可被為 在、其御中へ奉嘆訴候ハ恐入、且
 ハ段々月日も相後レ可申、水戸表之模様一日後レ候へ者、一日丈相崩レ候勢ニ御坐候間、御発駕以前奉嘆願候、右之
 模様御承知被遊候上にて、
 御参府被遊候様仕度、兩人申合、内々水戸表出立、此度恐ヲも不顧、
 御城下江罷

出候仕合に御坐候、中納言様御不慮之御災難に御逢被遊候次第、種々の取沙汰ハ御坐候得共、御領中の寺院不行跡之僧徒共、夫々退院等被仰付候処、右僧徒共、元より他国ものゝ義故、中納言様を法敵之様相心得、種々の讒言申ふらし、尚又御恥しき義に者御坐候得共、御家中にも、内心にハ奢侈・安楽を好ミ、文武等を嫌ひ候もの有之、右之者共も彼是誹謗奉り、右両条之讒言広く相成、乍恐中納言様にハ容易ならざる御企にても被為在候様、入御聴候義と相見、御家中の身分、一日も安し兼候事ニ御坐候、乍去御三方様之御類にハ、たとひ御政事向不宜事御坐候とも、先ハ御役人共へ御察当御坐候のミにて可然御儀と奉存候、其上ニも御改メ不被遊候ハ、御内意の上、一ト通り之御隠居被仰出候にて可然義と奉存候、然ル所、一寸御用御坐候様なる奉書ニ而、御参府被仰出、御内意も無之、直に御隠居、御慎被仰出、尚又追而御慎ハ被為解候へ共、御政事を御封シ被遊、是迄御先例ニも無之、御連枝方御後見と申義、畢竟最初の御疑ひいまた丸々御晴被遊兼候ゆへと奉存候、此儘にて打過候ハ、世間より見候てハ、中納言様ハ公辺江御対し被遊候而、実に御申訳無之事とも御坐候様ニ相成、御家之御瑕瑾無此上、少将様御成長之上にて、於御孝道何程歟御残念に可被為思召哉と、志有之者一統相嘆キ候次第に御坐候、是等之所、乍恐御推察被成下、御参府之上、宜敷御世話被為在、水戸表忠義之士民一同安堵仕候様奉願候、以上

右之趣、御序之節宜敷御披露奉願候

二月

姓名^⑮

①水戸中納言（斉昭）家督以来十七年ニ齊昭が先代（兄）齊脩の死後、襲封したのは、文政十二（一八二九）年十月十七日である。「以来十七年」を数えると、弘化二（一八四五）年が、九一六年目にあたる。

② 学校 天保十二年八月開館（建物は未完成）した弘道館

③ 去五月中俄の参府 前番「一三三」書翰註①

④ 武田彦九郎 武田修理正生、のち耕雲斎

⑤ 吉成又右衛門 吉成又衛門信貞、南郡郡奉行

⑥ 水戸家老 城代鈴木石見守重矩、及び太田丹波守資春、興津藏人良恭、結城寅寿朝道ら、反斉昭派が多い

⑦ 御連枝 水戸家の三連枝、高松松平家（讃岐守頼胤）、常陸府中（のち石岡）松平家（播磨守頼繩）、常陸守山松平家（大学頭頼誠）の三者

⑧ 赤坂・市ヶ谷 赤坂は尾張徳川家の中屋敷、市ヶ谷は紀伊徳川家の中屋敷

⑨ 十一月廿六日 老中阿部正弘、斉昭の「謹慎」のみを解く

⑩ 三連枝後見 五月六日、斉昭の致仕に代って家督を嗣いだ慶篤の藩政を摂行した三連枝（右の註⑦）の後見体制

⑪ 武田・吉成への処分 斉昭致仕後、水戸藩にあっては、雪冤運動で出府する士民の動きが次第に顕著になるが、密かに江戸に潜入して、弘化元年十月二十日、水野老中邸に歎願した武田正生、牧野・堀岡老中邸に歎願した吉成信貞は、その行動を直ちに水戸藩邸に通報され、捕われて水戸へ送還され、水戸で禁錮となった。

⑫ 老中阿部正弘への歎願 弘化二年正月二十八日、武田正生次男魁介、及び吉成又衛門次男恒次郎、連名で阿部老中邸へ直訴。

「二月付」の連名の歎願書がある（『水戸藩史料』別記下、巻二十六、七百二十八頁）。その前後に、阿部老中邸や堀老中邸へ直訴した藩士・神官多数あり。

⑬ 大納言 紀伊徳川家、徳川斉順、文政十一年二月、從二位・権大納言となる。弘化三年閏五月八日薨。

⑭ 少将 徳川慶篤。ここで「中納言」とあるのが前藩主斉昭。少将はその長子で、新水戸藩主慶篤、弘化元年五月六日襲封。同年九月二十一日、正四位下・左少将となる。

⑮ 姓名 差出人の二名は、菊池為三郎（重善）と、もう一名は武藤子之次郎（中奥番）であろう。（『水戸藩史料』別記下、巻二十六、七百三十三頁参照）

内容 一、水戸中納言（斉昭）の家督以来一七年間の治績をたたえ、弘道館における（為三郎の）取立てに感激す

一、去る五月、斉昭俄かの出府命令の上「不慮之御災難」を受く

一、郷中百姓まで一統悲嘆慷慨す

一、百日、百五十日経つても有免なく、領内次第に不穩を強む

一、家臣総代武田正生、郡奉行吉成信貞出府歎願あり（天保十五〃弘化元年十月）、又家中・農民思ひ／＼の出府歎願あり

一、十一月二十六日（天保十五〃弘化元年）「慎御有免」あるも、「三連枝後見」は変わらず、一統悲歎にくれる

一、しかも今春にかけ、雪冤運動家の士農多く処分を受く

一、武田正生子魁介、吉成信貞子恒次郎、出府して、（弘化二年）正月二十八日阿部老中へ歎願

一、紀伊大納言（徳川斉順）の出府と周旋を歎願する次第

一、両名内々で紀州和歌山城下へ潜入して歎願す

一、斉昭処分については、水戸領内の「不行跡の僧侶共」の讒言が強し

一、斉昭の「政事」復権を歎願

一三四、弘化二年 菊池為三郎他一名歎願書別紙口上（写）、紀伊徳川家宛

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一〇、状、これは伊達宗城の筆

口上覚

私共両人心願之次第、委細本文ニ奉申上候通御坐候所、本文之内に、一日相済候得者、一日丈御国政相崩れと申義者、余り甚敷様に可被 思召哉も難奉計候得共、実以右之次第に御坐候、外にも候得者、口外仕兼候へ共、乍恐御一体之御義故奉申上候

中納言様にて御用ひ被遊候大小之御役人、去五月以来最早三四十人も退役下転仕り、御家老ヲ始、奥御祐筆等に至迄、大抵先年 中納言様にて御退け被遊候族再勤仕り候間、右之族者、 中納言様にて御政事に御携り被遊候ハ、又々御退けに可罷成、心配仕候義者、差見候間、 中納言様御政事に御携之義者悉く相防キ、夫故忠義之百姓等入牢

申付候にも至り候義ニ御坐候、既に小石川にて、近頃御政事を執り候御家老之内ニ^③ 中納言様にて御携にてハ執政

之立場も好ミ不申候得共、御携無之なら者相勤可申と口外致候人物、当時相勤居候姿に御坐候間、 大納言様御参

府被遊候而も、水戸表之模様、右執政杯に御改被遊候ハ、彼是取繕ひ、水戸表一統静謐に御坐候得とも、只少々党

立候者騒ケ敷御坐候由申上候義者必定と奉存候、御恥しき義にハ御坐候得共、人々身之為のミに抱り、 中納言様御

義御冤罪丸に晴れ不申而ハ、水戸ハ勿論、御両家様御瑕瑾にも相成候所ヲハ了簡不仕候段、何共浅間敷義に御坐候、

尚又御連枝方之義者、 中納言様御慎被為候解上ハ、御後見御免御願被成候而可然御義理合と奉存候所、兎角水戸

表治り兼候故、治り候迄御後見も御辞退被成兼候との御模様御坐候、却而御後見被成候程、ますく治り兼候と申所

江ハ御心付無之と奉存候、御連枝方何れも結構成御方之由ニハ御坐候得共、御三人ヲ合候而も、 中納言様御片腕

にも御六ヶ敷義者、一統奉承知候義、尚又大塚杯ハ近年御家政治り兼候由ニ而、二三年以来小石川より御訴、家老被

仰付、漸に無事に相成候由、二萬石之御家政御行届無之、御家之御後見御珍しき義と、下々迄内々嘆息仕り候得共、

御連枝方江ハ申出兼候義理合故、不得止事ヲ相忍罷在候仕合に御坐候、去年中と違ひ、 公辺にても近頃者御後悔

之御模様も御坐候歟に承知仕候得共、去五月中之事丸に反古に被遊候而ハ、御威光に拘り候ゆへ、御政事江ハ御携り

無之様、先ツ被 仰出候義と奉推察候、仍而ハ、御連枝方よりも、御後見御願に相成候ハ、御都合も宜敷様奉存候、

是等之義、有志之者共彼是と内々嘆息仕候へ共、 申出候義も不罷成候所、 大納言様御参府之上、 公辺江も

被 仰立候義ハ勿論、右御連枝方へも吃と被仰合候ハ、御連枝も違背者仕間敷義と奉存候

右ヶ条、御連枝方御役人共を誹謗仕候様にて、如何敷御坐候得とも、委細不申上候而ハ、却而恐入候間、別而内密

奉申上候事に御坐候

① 兩人ハ「一三三」番と同じく菊池為三郎と、他の一名、武藤子之次郎。本書はその「一三三」番の別紙上書

②奥祐筆⇨齊昭の謹慎後、谷田部通義（雲八、藤七郎）、及び尾羽克綱（平蔵）が奥祐筆に昇任。何れも結城寅寿の腹臣
③小石川家老⇨江戸家老は太田丹波守資春、興津藏人良恭、結城寅寿朝道
④大塚⇨守山藩（二万石）松平大学頭頼誠の上屋敷、大塚吹上にある。

内容 一、本文の「一日相済み候えば一日だけ国政相崩れ」と言う文言は、言い過ぎにはあらず

一、齊昭に従いし役人共、五月以来三々四十人も退役、降職となる

一、先年来齊昭の排除せし一派の者再勤す

一、紀伊大納言（徳川齊順）参府し周旋となれども、水戸邸にては彼是取つくろわんと考えられ、不安なり

一、三連枝も、後見体制が逆に藩の混乱を招くことに気付かず

一、三連枝合体しても水戸の後見の力なし

一、三連枝後見体制の解除も、水戸国元の平靜が前提なることは勿論なり

一、紀伊家の積極的裁断を期待す

一三五、弘化三々四年正月 菊池為三郎報知書

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一五、原本、状、（これ以降の菊池為三郎書翰は、弘化二々三年から嘉永二々三年のものであるが、年代が十分に確定できない）

（斜包紙）

「持参舌代別紙入

重 善拜

御直披 壹封添

当節、礫中事情探索仕候處、左之通御座候

一、当正月三日夜、小石川中納言様御寝所近所之庭中江賊入候趣、中納言様御心被為付、夫より騒立候ニ付、賊ハ何

徳川齊昭と伊達宗城出——河内

方江歟逃去候、右庭中ハ板屏(塀)ニ重ニ御座候由、其外ノ板ニ枚程たをれ、内之屏ヲ乗こし入候事と相見江、戸口之近辺ニ松樹御座候よし、其松之枝ニ土付有之候得者、其木ニ寄て越たるへし、又逃去り候時ト相見江、戸口之錠をはつし置候との事、其賊定メテ駒込ニ居り候天狗老公を御したひ申上候者さして天狗と申候なり①なるへしと切々鳴へ、甚敷ニ至而ハ、礫公を御殺申上候ため入たるなるべしと申鳴候趣ニ相聞申候

一、五日夜駒込住居之御駕籠之者、未タ禄なくば小石川江年礼ニ参り、終日酒たへ過候哉、大酔ニ相成、夜中小石川同役詰所ニ入倒ふし候由、右之者初より殿中ニ而入事ならざる所江入候事と相見江、土付候足跡有之候よし、前日賊入りたるニ付、夜廻り敵重ニ有之候ハ、夫ヲ見付相糺候處、右之者大酔ニ而、泥足ニ而休居候よし、直ニ召捕ニ相成、数度穿鑿有之候よし、右ハ前日之疑心ニ而召捕相成候との事ニ御座候、定而駒込天狗ニ使ハれ来るなるへしと責候處、更々大酔ニ而何も存し不申、只同役之所江参度のミにて参り候と覺申候旨申聞候よし、此もの全ク大酔致候て間違ニ無違趣と相見江候よし、依而此者平日之行跡等同役共坏へ見聞相懸候處、平生至極実体ニ而、勤向等別而厚ク心懸、出精仕候者ト申出候ニ付、また能ク前日之賊入候事ヲ糺候處、全ク賊ニ者無之、板屏古ク相成、釘クギ用兼候所江、其夜風強ク吹候故、例れ候事、又内々板戸明居候由、其夜御用ありて開候よし、然ルを、当番之坊主忘れ開け戸ヒべり不致候事、又松枝ニ土付候ハ、狐狸多ク候故、全ク狐狸之業なるへしと、役人とも之見聞ニ而、右大酔之者ハ、十五六之頃許サレ、先同役江預ケニ相成候趣ニ御坐候、右故、役人坏大方夫々無相違と申出候よし、其内又駒込より来る賊ニ無相違と申鳴江候役人も御坐候よし

一、此節役人之内申鳴候ニ、天狗共之内小石川様を御たねらひ申候もの有之候と申義を切々申候よし、既ニ小梅下屋敷江御鷹野ニ御出ニ相成候ハ、いつも未明御出ニ相成候よし、夫を此節ハ天狗共御ねらひ申上候間、早天御出ハ不宜、朝寛々御出被遊候様ニと、切々御諫言申上候役人御坐候よし、右ニ付、峯寿院様此節夫等御聞被遊候て、殊之外

御心配被遊候趣ニ御座候

但シ、又前条云々に付ての事ニ御坐候哉、千住ニて右を為致候由、然ル所、火災之難有之との談判御坐候由、依て新御守殿出来候ても②、天狗ニ焚れ候ニハ不相成とて、切ニ夜廻り番人等嚴重有之候よしニ相聞申候

右者、役人之内姦氣強ク候者離間策行末遂かね可申と心付候哉、此節必至と右様之事言上仕候ハ、深隔絶之姦謀を廻らし候事と相見申候、有志之者共ハ夫ニ引替へ、御父子御和合を祈居候事、歎ケ敷事ニ御座候

①天狗ニ菊池為三郎は「天狗」をこのように定義づけているが、徳川斉昭自身は、「新伊勢物語 一」に収めた斉昭自身の弘化二年十月二十六日の阿部正弘宛の書状の別紙に、自ら次のように註記している。

「江戸ニてハ、口慢者を天狗と申歟ニ承り候所、水戸ニてハ義氣有之有志の者を天狗と申候、たとへハ、勝手困窮ニて、今日の暮ニも指支ながら、食し候者も食し不申、書物を買入、又ハ刀劔・甲冑杯買入、容易ニ人ニ出来不申事を致候を、中々人の出来候事ニ無之、天狗ニ可有之と感心致候より、義氣つよく、国家の為ニ忠を存候者は、何レも天狗の仲間、是も天狗の仲間と申様ニ相成候義ニて、天狗と申ハ、拙老が国ニてハ義勇のかへ名と申者ニて、江戸ニて申候とハ相違ニ有之候、乍然此節姦物共盛ニ相成候てハ、天狗ハ悪人のかへ名と可相成候、御一笑可給候、拙老も幕府へハ兼々忠節の心得ニ候へハ、姦物よりハ大郎坊とも可申歟、呵々」『茨城県史料 幕末編Ⅰ』所収「新伊勢物語」三七頁

②御守殿ニ峯寿院（先々代徳川斉脩未亡人、十一代將軍家斉女）の御殿、天保十一年五月二日小石川邸火災（「本号」一三三）（②註②参照）で焼失したので復興

内容 一、礫（礫川、小石川水戸藩邸）の様子を探る

一、正月三日、中納言（慶篤）寝所の庭に賊侵入

一、賊は駒込邸（弘化元年五月の致仕・謹慎で、斉昭が移る）にある天狗（斉昭派）の者で斉昭と慶篤を離反せんためとの噂あり

一、五日夜、駒込邸家臣、小石川邸へ年礼に参り泥酔して不埒な行爲

一、慶篤をねらう者ありとの風説流れ出し、小梅下屋敷鷹野行きも早朝は危険と説く

一これらの「噂さ」を峯寿院（先々代斉脩未亡人）がことのほか案ず

一、先の火災に遇ひし御守殿の再築も、放火をおそれ嚴戒中
一、斉昭と慶篤を離反させる策謀あり

一三六、弘化二年六月六日 菊池為三郎書翰、伊達宗城宛

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号―二、原本、状

〔斜包紙〕
ノ

上

菊池為三郎
「拜」

乍恐以書付奉言上候、弊藩動静承及候事共、先頃中奉申上候品之内、去ル望日、當中ニおゐて閣老阿君江、高松御逢之義、前日承込候にハ、何歟閣老より高松江御達向にても御坐候様之意味に承り及候処、又近頃一覽承及候趣にてハ、却而高松より御逢を請候様之意味ニ相聞申候、其言左之通御坐候

高松申出候ニ、向御弟老公^①一体世話好にて、何事ニ不寄黙し不被居、賢諸事世話被致度様子、夫故政事向など彼是と被申候故、政事兎角治定致可承候、近頃ハ別而世話致過候様相成、当主にも迷惑被致候事不少候、依之、此上ハ幕命を以国隠居と被仰出候様、御所置被下度希候云々意味之よし、閣老御申聞ニハ、右様之義ハ、御当人より強而御願にても有之候事ならハ又格別之義にも可有之候得共、幕より左様之儀御仕向申候様なる義ハ、決而不相成事にて云々意味之よし、夫より閣御議論種々御坐候様子との事、其跡にて礫公江御逢ニ相成、格別御談判御坐候事之よし

〔別筆〕

② 「山岡衛士トカ」但、右応答云々は、閣老臣公用人某之之内話と申事ニ及承候

右ハ、前日承候所にてハ、始礫公江御逢、礫公より老公御登宮御願之義御相談と相成、閣老にも結構之事とて、直ニ筆を取られ、願、蘭書御訳被進候事、依之、今吉茲等必至ニ相成、右恐賀江付込、水府御隠居と被仰出候様ニと、四方ニ周旋之含有之候と申事ニ御坐候処、前段咄之様子にてハ、最早其事既ニ高松より施し、夫より事發候意味ニ相聞申候

但、閣老蘭書御訳被進候義ハ、即日能州江御下ニ相成候得者、無相違事ニ御坐候亦、監府辺ニて心を付候処、御談論ハ頗有之候様子との事、且ツ高松と者餘程の御議論も御坐候様子にて、閣老退参之節も、憤満之気色相見得候と申事之よし

右云々承り候ハ、礫政府辺之内話、此度承込候云々ハ、外より承候事ニ御坐候、何れ歟是非未詳候得共、都而好風ニ御坐候、何卒速ニ吹出候様奉祈望候、是等之義、疾々事實御詳悉被遊候半とハ奉恐察候、承及候義、且先比中奉言上候処とハ少も相違も御坐候ヘハ、未タ是非不分明ニハ御坐候得共、何等之為奉申上置候、餘者都而依然罷在候様子、併漸々模様ハ宜敷と申事ニ御坐候、扱又近頃比企江度々面会仕候処、至極預厚情、左膳同様入懇仕候、欣躍無量奉存候、偏ニ御徳沢之高蔭難有奉仰拜候、先ハ前条奉言上度、恐惶々々百拜謹言

六月六日

重 善 拜

〔奥封ウツ書〕

上

「

- ①御弟ニ高松藩主松平頼胤の養父頼恕は、頼儀の養子として水戸徳川家から入った者で、斉昭の実兄、紀経
②山岡衛士ニ老中阿部正弘付公用人か

- ③蘭書御訳ニ弘化元年七月到着の、オランダ国王ウイレム二世よりの、幕府への開国勧告文の訳文のこと

斉昭が弘化元年二月に致仕していたため、直ちに斉昭は訳文が見られぬまま、一年近く後の弘化二年六月一日付で「拒否」

の返答を発することになるが、斉昭は、弘化二年二月一日に国書と返書の内閣を要求、それを見、二月十八日と二十九日に直ちに所見を述べている。(「新伊勢物語」)

④能州Ⅱ興津能登守克広(勇之介)、興津藏人良恭の子

⑤比企Ⅱ宇和島藩士。同藩の「嘉永分限帖」に比企藤馬あり

⑥左膳Ⅱ宇和島藩士吉見左膳、長左衛門

内容 一、去る五月十五日、當中にて、阿部老中と高松(松平頼胤)との会談あり。これは高松侯よりの申出か

一、高松よりは、斉昭の国政介入を排し、国元隠居を進言せしならん

一、右は老中公用人某(山岡衛士か)よりの内話

一、もともとは老中が礫公(慶篤)に会い、礫公よりは老公(斉昭)の登営許可を願いたるに老中が同意したる由。しかしそれに水戸の「姦派」が強硬に反対、種々入説したる結果の由

一、老中よりは、蘭国書翻訳の閲覧認め、即日能登守(興津克広)に下附される事となりし

一、本信の情報、礫邸内よりでなく、他より得しなり。未確定の点あり

一、礫公の周辺の情勢は「好転」しつつあり

一三七、弘化三々四年六月々八月 菊池為三郎筆、風聞書

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一七(3)、原本、状

一、六月中、王子扇屋と申茶屋ニ而、中山備、太田丹、内藤等、其外名前不分候得共、頗ル奢侈を極候由、礫出入、

右ハ本郷之町人大光新三郎と申者、賄賂之為同道候よし

一、八月中、太丹本所二ツ目相模屋と申茶屋に而、奢を極、藝者十四人ほども出候由、夫より藝婦ともを従へ、舟行致候由、是ハ其相模屋と申事、不分明に候得共、御旗本某通り懸り、右之騒きを見請、名前等承り、帰候而、當中に而大に笑ひ候趣ニ候、是も同断御守殿御普請受負候町人之賄賂と申事ニ候

一、御国御隠居之風説、水戸および礪邸中ニ而も、俗人等申唱候よし、是ハ来年中御入奥之恐賀ニ乗シ、奸策を施し候積りならん、最早本丹^⑤、内一等ハ、何も申合候事ニも可有之歟、左候時ハ、愈離間隔絶と相成、後來如何様之機会有之候とも、再び御和談と申事ハ不相成候、老公此儀御心配不啻候事

① 王子扇屋^②江戸北郊飛鳥山周辺からその北方に軒を並べる茶屋の一つで、王子権現や王子稻荷にも近く、江戸文芸にもしばしば登場する著名な茶屋

② 中山備^③水戸藩家老中山備後守信守

③ 太田丹^④水戸藩家老太田丹波守資春

④ 内藤、内一^⑤内藤藤一郎業昌(右膳、貞確)。反斉昭派の活動家。第十五号内「五八」註^⑥他

⑤ 来年中御入奥^⑥有栖川宮線姫の慶篤との婚儀のことならば、それは、嘉永五年十二月十四日に行われる。

⑥ 本丹^⑦本郷丹後守泰固、駿河川成島藩主、側衆

内容 一、六月、王子扇屋にて、中山・太田・内藤ら会合して豪遊、本郷の町人の賄賂か

一、八月、本所相模屋にて、太田豪遊、御守殿普請の賄賂か

一、斉昭は国元隠居となるやの風説。太田・内藤らの策動か。そうなれば対立ますます深化せん

一、内藤らは、將軍側衆(本郷泰固)へも取入るか

一三八、嘉永二^⑧三年八月頃カ 菊池為三郎意見書(下書カ)

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一七(2)、原本、状

一、阿候先達而中、姉殿へ何歟云々談候義も有之候由、又姉云々答候由、何等之儀に可有之哉、近頃又一説に、不遠内御登 営も可有之哉など、密に承及候義も有之候、若夫等之義を被談候にハ有之間敷哉、御登 営之義ニも御坐候ハ、臣子たるものゝ為にハ、誠に恐賀至極難有御事、元より所願也、然レ共、御登 営被仰出候ハ、先ツ夫

なりニて寒を除く之宿願ハ、いづれも通達相成兼候事ニ御坐候、右除寒之事御発シ無之候而ハ、弥張是迄之姿にて次第に離間之奸策ハ被行候とも、御熟談之上、御政体恢復と申義ハ不相成事指見候事ニ御坐候、其故ハ、七ヶ年来之醜氣愈染渡、中々以御和合萬端御相談と申所にハ決而不参事ニ候、除寒命令無之候て御登 營発候ハ、御登 營之恐賀よりハ亦十倍離間之奸謀廻り候事、疑も無之事と奉存候

①姉江戸城大奥、奥女中姉小路、京の公卿橋本実久の姉（又は妹）、名いよ。徳川斉昭とも遠縁にあたり、老中阿部正弘とは特に親しく、実力者で、政務にも深くかわったという。

姉小路の妹が、水戸藩小石川邸の奥女中花の井であつた關係で、水戸藩士は、彼女に斉昭の雪冤のための運動を働きかけていた。

なお、大奥でこの姉小路に対抗していたのが年寄三保山である。三保山は、斉脩未亡人孝寿院（水戸御守殿）と従姉妹で、紀州家と縁戚でもあり、前將軍家斉の寵愛を得てもいた。斉昭も水戸藩關係者も、この三保山にも強く働きかけ、その運動に期待するところがあった。この二人の大奥女中を通す手づるは、彼女らの強い対抗意識から、効果が期待されなかつたようである。（『水戸市史 中巻』一三八頁以下）

②寒を除く「寒」「奸」。反斉昭派の排除

内容 一、阿部老中、大奥女中姉小路と会談の噂

一、遠からず（斉昭の）登營許さるとの噂

一、先ず「除奸」を實行し、父子「離間」の奸策を排して「政体」回復が先決なり

一、しかし、七ヶ年来（弘化元年の斉昭謹慎から数えると、七ヶ年は、嘉永三々四年になる）の「醜氣」を払拭、藩内和合は仲々困難なり

一三九、嘉永三年か 菊池為三郎建議書下書

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一七(4)、原本、状

。同列ニ異同有歟、筆頭御吞込候ハ、事不行咎ハ有御坐間敷事

。又、御同列御一改ニても、雉門^①辺にて御取扱之御わけ合にも可有之哉、右へハ私外御兩人を以雉除と申様之義ニ相成間敷候哉、右も不相成候ハ、御直御伺と申様之義ハ相成間敷哉、尤先例無之御義とハ奉存候へ共、往年水国之義、先例も無御坐義を御被仰出候へハ、又非常之御英断不被行と申御義は有御坐間敷哉

。(空白) (頭部よりこゝまでは、余白に後からの書加え)

○社倉秘議

一、御三家之義者、国持始諸大名之模範ニ相成候様にとの御達も御坐候上者、水府近來次第ニ文武相衰へ、国政取乱候役人共、多有之候にも無御構、御差置被遊候様にてハ、先年之御達者反古ニ相成候、諸家疑惑仕候のミならず、萬一異船等非常之事も有之候節、第一^{乍恐} 公辺之御不為ニ可相成哉と奉存候

一、甲辰以来、水府事情追々御調へに相成候内、——殿朝夕之膳にも之ヲ被置候様心配被致候所、追々全く之事情に有之候処、七寒等揚ら自得し重役共幕府之御威光を仮り、専ら取扱共、其儘御構も無御坐御差置に候ハ、一国之有志^皆之苦心ニ不堪義ハ勿論、天下之有志もますく伝聞、幕御大政をも何とか申上候半、是亦御不為に可相成と奉存候

一、先達而海防御巡見、水戸領へも御廻りニ可相成風聞に付、寒有司共俄ニ相騒ぎ、台場等躰能心ヲ付候様、彼是指支にて候へ共、御巡見御廻りにハ不相成との事聞候へハ、俄ニ相止ミ、一向ニ懸念も不致候のミならず、阿部殿ハ猥りニ外寇を恐れ候て人氣を騒候故、近來甚御不通りニ相成忤申合候事、慥ニ承申候、是亦大政を誹謗輕蔑仕候義と奉存候

一、米トタン等之義、追々御取調ニ相成候処、右ハ役人共不正私利者勿論之義ニ候処、只夫のミにハ無之、天下之御大

法大禁ニ有之所、右を記し候人々賄賂を取入、御政事ニ相触候義に候処、先年——殿に者、御制度に相触候廉を以、
 嚴重ニ被仰出、其臣下ニ候へハ、御見聞濟と申候てハ、是亦天下之人心疑惑仕候ハ、後代迄之伝説にも可相成哉
 と、恐多奉存候

一、水府追々之事情、委細ニ御取調ニ相成、屹と思召も有御座様奉伺候処、今以何等被 仰出も無之義ハ、御同列ニ
 異論之御方も有之歟、左も無御座候てハ、御筆頭御吞込ニ相成候ハ、不被行と申答ハ有御坐間敷哉と奉存候

一、御同列様方御一致被成候ても、雉子橋^①にて御取扱之御差支にも可有御座哉、萬一左様之御義にも候ハ、雉子
 橋之方御除外、御兩人のミ御用と申様にハ相成間敷哉

一、御兩人之御直御伺と申様之御義ハ不相成ものニ可有御坐哉、尤御先例無之御義とも奉存候へ共、甲辰之節、御先
 例無之御義をも被 仰出候上ハ、又格外之御英断を以、不忠之奸人共嚴重に御正シ、御懇義被為在、天下之公論相
 定候様為被行候半とも奉恐察候

一、当春、水府役人共之事御取調之義も御坐候哉ニ承及候処、小監察初桜井三郎、岩瀬繁三郎、静間信介兩人、御用
 を承候由之処右之者より者、御普請役桜井三郎^⑥へ相漏より慥ニ承候もの御坐候、桜井事弟水府新召抱鈴木藤吉郎へ
 懇意にて、右兩人を引合せ、右之もの共集会之上、相調候由ニ御坐候、右藤吉郎義ハ、丹波守へ別而之懇意にて、
 而三日置にハ必罷越、深更迄も密談いたし居候ものに候へハ、此ものより丹波守・東一郎等^⑧へ洩候義、必然ニ御坐
 候、当人存知候上ハ、必死ニ相防候間、其節より只今ハ猶更害深く相成候処、此上にも御寛容ニ被成置候ハ、尚
 更ますく奸人之計策堅固ニ行届、御手入も六ヶ敷可相成哉と奉存候

一、右奸人之計策、堅固ニ行届候半と奉存候義者、尤右之者共より 幕府御大勢之御役人之内へ、不正之手筋を以段々
 に取入、内外合併にて取計候ハ、如何様之密計も可相成哉と奉存候、左候ハ、

一、去四年^⑨、公辺より海防之義に付、三藩へ相達ニ相成候処、水府重役共に者、右を相秘し候義にも候哉、遂ニ家中へ達し出し不申候、且ツ又敵命を蔑ニ仕候義と奉存候、其儘に掌握仕置

(以下裏面)

一、両方之御中を隔間いたし候義ハ、中納言殿御守殿御機嫌伺ニ御出無之義を(中断)

① 雉門・雉子橋門ニ江戸城本丸北側、外郭北の丸の門で、一橋門の西側、清水門との間の門

② 甲辰ニ弘化元年五月六日、斉昭の致仕、謹慎

③ 米トタンニ「米」と「タン」か。タンは太田丹波守資春か。

④ 御両人ニ老中の内の二人か

⑤ 岩瀬繁三郎、静間信介……このところ人名未詳である

⑥ 桜井三郎

⑦ 鈴木藤吉郎

⑧ 丹波守・東一郎ニ太田丹波守資春、内藤藤一郎業昌

⑨ 去四年ニ嘉永二酉年か。

内容 一、御同列(老中)一改の問題

一、雉子橋門の動き

一、御三家は諸大名の模範たるべきなれど、水戸藩は近來文武衰退で、不安

一、甲辰(弘化元年斉昭致仕)以来、水戸重役は幕府の威光を偲るのみ

一、幕府の海防巡見の風聞にあたり、水戸奸派の大あわてと取りつくろい。阿部老中の海防重視も非難

一、両人の直伺は先例なくも、甲辰の処分そのものが先例なきこと

一、水戸への新たな「処置」なきは、老中の不一致のためか

一、当春水府役人の取調べありしか

一、岩瀬・静間は普請役桜井よりたしかなる者

一、桜井弟は鈴木藤吉郎及び太田丹波守と近く、密話は太田・内藤へ洩れん

- 一、奸人は幕府役人大勢へも取入る
- 一、酉年（嘉永二か）海防の達

一四〇、嘉永三年八月六日 菊池為三郎書翰、伊達宗城宛

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号——一、原本、状

（斜包紙）
「上

菊池為三郎
拜」

乍恐以書付奉言上候

一、先頃中藩邸事情書取、奉言上候、已來格別之異状も無御坐候様子ニ相見得候へ共、兼而内評御坐候丹波一条弥相發候、右者去ル念五六之比、当方にて新太郎定府之命相發候、同日国元にて丹波国勝手之命相發候趣、近日文通にて申來候、幸慶無量、欣躍之至奉存候、過日奉申上候通り、今喜等御守殿江入説、余程難物ニも可相成哉と痛心仕候処、無障相發候事ニ御坐候、此儀先々乍恐 御安慮被下置度奉存上候、此先順能漸々好風發候様、何卒可然御周旋之程奉希上候

一、前文丹發已來、姦氣愈必至と相成候、右過日ニ奉申上候通り、其術国後宮ニ寄頼、彼是と申成し、御登營遲滞之謀を廻らし、其内ニハ御入興之期ニも近寄、旁謀訴を施し候時節可有之など、工夫無疑事と奉存候、右等姦謀詐偽不及候中ニ、何卒好風速ニ相發候様奉希候、此機會偏ニ 御亮察之程奉希上候

一、乍恐先般奉希上候筒井翁之方、如何之様子ニ御坐候哉、是実ニ良援と申事、窃ニ承及候、何卒此上可然 御良策

奉希上候、右等に付、乍恐 御深慮も可被為在候御儀、不苦候御義ニも御坐候ハ、比企迄被 仰下候様奉祈望候、
誓而他人江泄漏者不仕候、此段乍恐奉申上候

一、先比中、内々比企手元迄申出置候鴨伝江内命之義、窃ニ奉達 尊聴にも候哉之趣ニ而、 御内旅之趣、内密比

企ヲ委細被申論候、 御高示之趣、至極御当然之御儀、奉恐服候、同志共へも内々通達仕候処、是又御尤之御儀

と奉感服候、右等奉煩 尊聴候義、私ハ勿論、二三同志一統奉恐入候、 御内論ニ従ひ、何れに欺談合も調候義

ニも可有御坐候、此段又奉安 御聴度奉希上候、右比企迄申談候へ共、尚又奉安 尊聴度、不顧恐惶奉言上候、誠
恐誠惶拜、謹言

八月六日

小臣 菊池 善

①丹波一条ハ水戸藩家老太田丹波守資春。のち嘉永四年六月二十四日、斉昭の論を受け、岡田新太郎（信濃守、徳至）を「定府」
として江戸へ移し、朝比奈弥太郎泰然を水戸へ帰す

②新太郎ハ岡田信濃守徳至、徳之介、兵部、確翁

③今喜ハ今村喜左衛門孝則、結城派の一人

④筒井翁ハ筒井肥前守政憲、西丸留守居

⑤比企ハ宇和島藩士。本号「一三六」註⑤参照

⑥鴨伝ハ水戸藩士鴨志田伝五郎重明（養真）

内容 一、水戸藩内情の報知

一、兼て内評ありし、家老太田丹波守資春の帰国、国元より岡田新太郎徳至の江戸転任を発表の予定、悦しき限りなり

一、今村喜左衛門孝則等の、御守殿入説など妨害工作、かねてから強し

一、なお斉昭の登宮妨害の動き強し

一、筒井政憲への働きかけは良策なり。比企へ、御考えを伝えられたし

一、先頃、比企へ伝えおきし鴨志田への内命の件

一四一、嘉永三年八月十七日 菊池為三郎書翰、伊達宗城宛

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一八、原本、状

(京都を経て江戸へ出た菊池から、参勤して江戸にある宗城への書状)

(1)

「(斜包紙)

上

菊池重善 拜」

乍恐以書付言上仕候、殘災于今去兼候処、先以 閣下益御機嫌能被遊候由、恐賀至極之御儀奉存候、然者 御参府以来、尚更御丹誠被下置候段、毎度親友共より申来、 御深慮之程奉遙察、難有仕合ニ奉存候、 御蔭を以、追々模様宜、不遠可賀義も可有之趣、誠に国家之大幸、一統難有、 高德御慕申上候事ニ御坐候
景山公ニも嘸御満悦思召され候半と奉恐察候、扨、私義、此度御国表ニおゐて願出候処、早速願之通相濟、上京仕候、^②右用事者、当春中願上候意味、尚又外に一事到來旁願出候事ニ御坐候、是等之儀ハ、松・吉二士迄委曲演説仕候間、定而言上相成候義と、相略、不申上候、 御発駕之節、蒙 仰を候義も御坐候へ者、仮令、如何様之用事御坐候とも、不奉待 尊命進勤仕候儀ハ恐懼之至ニ奉存候得共、京都方知己之者共より、切ニ飛札数度ニおよひ候に付、厚志黙止兼、且又其事即今当然之儀ニも可有之歟、左候へハ、敢て黙止居候も忍兼候に付、不得止を、奉待 尊命願出、發途上京、尚又出府ニおよひ候義、不本意至極、多罪恐入候儀ニ御坐候、加之御程合も不奉伺、御邸内へ参上、是又恐懼之至に奉存候得とも、当節之機會奉願上度儀も御坐候に付、不顧不敬参上仕候事ニ御坐候、扨私義も此度出府仕候処、能折柄に而、国元より荻吉次郎と申者罷出、于今滞留罷在、着即刻面談仕候事ニ御坐候、吉次郎義ハ、元來親

友無二之同志、久々に而面談、互に欣躍仕候事ニ御坐候、同人出府之儀者、願濟に而罷出候趣、尤 景山公御深慮も被為在候由、定而御通信に而御承知も被為在候半と相略、不及言上候、同人義ハ、水府時情も能存居候者に御坐候へ者、御嫌疑も不被為在候ハ、御召寄御尋向被下置候ハ、難有仕合奉存候、当方ハ公然と仕居候へハ、何も嫌疑等之儀ハ聊無御坐候事ニ御坐候、扱又同人義ハ、砲術ハ相応ニ心得居候者ニ御坐候へハ、砲術之義御尋被遊候名に而御目通り相濟候ハ、御直に当時江水時情、委曲言上、尚更御周旋も奉願上度義不少趣ニ御坐候、可罷成御儀にも御坐候ハ、此段於私奉願上候、扱又同人工夫仕候大銃製造之雛形一見仕候処、至極輕便之様ニも奉存候に付、即持参、入 高寛申候、御用ニも相立候ハ、大幸之至り奉存候、扱又当機等も荒増者承候へとも、此節之義、何も承り得不申候、乍恐定而御詳密被為在候御儀と奉恐察候、不苦候ハ、内密奉伺度奉存候、此儀一同も渴望罷在候事ニ御坐候、尚又時情詳悉次第可奉言上候、当機之所、福閣へ十分に力を付申度、一同祈居候処に御坐候、 福閣ハ元來 閣下御懇意ニも被為在候へハ、私より其段可奉願旨申聞候処、吉次郎等欣躍無此上御頼母數奉存候、乍恐何卒御周旋を以、此機御勇断速に御発ニ相成候様、偏に奉願上候、右等奉願上度、不顧不敬、言上仕候、書餘松・吉二両より可奉言上候、恐惶謹言

八月十七日

菊池重善

頓首々々敬拝

上

(2) 別紙

副書言上仕候、私義用事御坐候に付、暫之間滞留仕度、願書吉迄指出申候、定而言上相成候義と奉存候、滞留中愈戒慎恐懼罷在候事ニ御坐候、此段奉安 尊慮度奉存候、右ハ餘り推参之義言上恐入候得共、可奉安 尊慮ため、尚

又不顧不敬奉言上候

恐惶謹言

- ①御参府＝嘉永三年、伊達宗城は三月三日宇和島発で参勤、四月七日江戸着
 ②為三郎の上京＝水戸から宇和島に匿われていた菊池が、藩命で、秘かに上京したことは、注目に値する。
 ③松・吉＝吉二士＝松は松根図書、吉は吉見長左衛門。ともに宇和島藩執政
 ④荻吉次郎＝水戸藩士荻信之介君寛。「第十九号付」の「一二〇」註①参照
- 内容 一、伊達家の諸配慮を謝す

- 一、水戸藩の事態好転の気さし、景山公（斉昭）も満悦ならん
 一、私（為三郎）、願出により上京す
 一、上京の用件は、松根・吉見兩人より聞かれたるべし
 一、了解なく突如の上京を弁明。京都方の知人よりの急便数度あり。さらに出府せり。
 一、不意に邸を訪問せしを詫ひる。
 一、水戸国元より来る荻吉次郎（信之介）と面談す。同人より水府事情を聞かれたし
 一、荻は砲術家にて、軽便なる大砲を發明
 一、この機をのがさず勇断の「御周旋」の出発をされたし。
 一、現在のところは、福閑（阿部老中）のもとへ十分力を結集して、事を行わすべし
 一、（別紙）私（菊池）しばらく江戸に滞留せん。願書は吉見まで指出すべし。滞留中は身辺を警戒せん。

一四二、嘉永三年九月六日 菊池為三郎書翰、伊達宗城宛

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号―三、原本、状

乍恐以書付奉言上候、逐日秋冷相加候へとも、先以 閣下益御機嫌能被為遊御座、恐賀至極之御義に奉存上候、時
 分柄折角御加養被遊候様、天下之御為奉萬祈候、然者、藩邸一義毎度御丹誠被下置候段、上下挙而難有仕合ニ奉存候、

全く御尽力を以、不日恢復も可相成勢、欣躍不可過之、難有奉感泣候、過日ハ松根より奉願候吉次郎呈書、早速御往復被下置、誠に以恐入候御事、当人者勿論、於微臣難有仕合奉存候

景山公ニも、閣下毎度の御丹誠、御満悦御頼母敷被思召、既に吉次郎へ御下之御返書ニも委曲被仰下候、尚此上

何分ニも御周旋之程可奉願旨御申下ニ相成候

景山公ニも、閣下毎度御丹誠之段、御満悦、御頼母敷被思召候、既に吉次郎御下之御返書ニも、委曲被仰候、尚

此上幾重ニも御周旋之程、為邦家可奉願旨御申下ニ相成候、[※]此段奉言上候、何分此上御尽力之程、偏に奉願上候、扨

此間中ハ、松・吉二士より御密論を蒙り、当機之模様明白安堵、^④時宜相待罷在候事ニ御坐候、

右 尊論之趣、一言親友へ者申聞候、微臣義者勿論、親友拳而安堵、大に力を得、難有仕合奉存候、決而 尊論之

段、泄漏等ハ不仕候間、奉安 高慮度奉存候、扨亦近頃 幕有志談之香氣、密に承及候ニハ、不遠内御登 當可

相成など申事ニ御坐候、誠に無此上も難有御事、信子たる者、元より所奉願ニ御坐候事、何共恐多き申分にハ御坐候

得とも、御登 當而已に而、兼而 老公御宿願之通り、除奸之 敕命無御坐候てハ、弥張是迄之通り、萬端御相

談之上と申候儀ニハ、迎茂六ヶ敷可有之、且ツ先例通り御登 當之上、御書付に而云々被 仰出候計に而ハ、弥奸謀

堅固に相廻可申、尚以恢復難相成勢必然と痛心仕候、是等 老公ニも深く御配慮被成候、右ハ去三月中被 仰出候

御恩命不相守候に付、又々七月中別而之 敕命御坐候得共、何をも不奉存、除邪とも、益根を堅め、奸謀十倍相廻

候事に而、当節に至而ハ、何共申上兼候事ニハ御坐候とも、離間奸謀充滿被行、^(奸)御父子御隔絶同様、中々以

老公之御誠意御發達等にハ、迎も不相成勢ニ御坐候、依而ハ何卒一日も速に除寒之 敕命被 仰出候様奉折ニ相成候

御義にも御坐候ハ、御登 當前御早く右 敕命被為在度、上下一統奉渴望候事ニ御坐候、御登 當も被為在候

へハ、亦一ト際寒策離間甚敷義ハ、去歲以来愈險症ニ成行候工合、痛心之至奉存候、併是等之義中々以申上候も恐多

き御事、廟堂御評議、御次第も被為在候御義にハ御坐候得とも、

老公之御危厄相同、殊に邦家之傾勢難堪痛心、

此段内々奉言上候、扱又、

高論阿公御丹誠云々、姉へ云々等ハ、右御登 當并に除寒之御英断ニ可有之と、難有

奉恐察候得共、亦々痴情を以奉察上候へ者、御登 當而已ニハ有御坐間敷哉、心配仕候、何を申も、七ヶ年来之醜氣

充滿仕居候事、尚又 公辺之嚴命すら奉背候奸人共に候得者、是非とも非常之御勇断無御坐候而者、無覚束奉存候、

當機會之所、先頃中吉氏より草書之儘、乍恐奉入 高覧候様之御所置にハ不相成御事ニ可有御坐候哉、何卒此上可然

御周旋御尽力之程、偏に奉希上候、書餘難尽怠筆、萬端松・吉二氏より可奉言上候、為社稷無拠不顧不敬、此段奉願

上候、恐惶々々謹言

九月六日

菊池為三郎

重善（花押）

上

①吉次郎Ⅱ水戸藩士荻吉次郎。信之介、清衛門君寛（前番「一四一」註④）

②當機の模様Ⅱ前番「一四一」にある如く、菊池が宇和島より上京、さらに出府して、水戸藩をめぐる事態の实情を確認し得たこと。

③吉Ⅱ吉見長左衛門。松Ⅱ松根図書 ※この部分文章重複するも、原文のまま。

内容 一、伊達家の諸配慮を謝す

一、松根図書より願ひ出た水戸荻信之介の呈書、早速そちらへ送付され、返信もあり、感謝す

一、今後も何卒「周旋」方を切望す

一、松根・吉見の了解にて、（上京・出府して）事態を確認して安堵せり

一、老公（斉昭）の登營の実現は見込みがついたものの、宿願の「除奸」には、なお困難あらん

一、しかし父子融和のため、「除奸」の嚴命を上下一統挙げて渴望す

一、阿公（阿部老中）の動き、姉小路への入説等は、「除奸」への英断に至るかとの希望的観測

一四三、嘉永三年十月四日 菊池為三郎書翰、伊達宗城宛

★宇和島伊達家文書、同前、第三八号一、原本、狀

乍恐以書付御受奉言上候、過日者御親書被下置、難有仕合奉存候、陳者、如 尊命不順之候御坐候処、乍恐 廣尾老上公御始、閣下益御機嫌能為遊御坐、恐賀至極之御儀奉存候、將、駒・礫兩館愈御安恭、且ッ追々冷氣相

成候故、景山老公御眼氣も如洗御清快ニ被為至候段、縷々 尊諭を蒙り、益憤中之欣歎、微臣ニおるて無此上安堵至極 御厚慮之程難有仕合奉存候、扱藩邸一体、毎々不一方 御配慮被下置候段、為邦家幸甚無量、難有御事ニ奉

存候、景山公ニも御満悦不可過之奉恐察候、毎度 御深志之段、恭被思召候趣、小臣江も縷々被 仰諭候事、小臣ニおるてハ欣喜無此上も難有感泣之至奉存候、扱又先達而中より追々松・吉二士迄言上仕候、事情 御深慮之上、御通達被下置候、且ッ一昨二日、愈辰方 御出駕被為在、即今模様委細御通被下置、尚早天より四鼓迄堂々御談論被為在

候御事、御帰館渴望、御邸内へ推参、吉子へ面会、一々奉存承候処、福閣ニも委曲御承引被成、篤と御含も御坐候由、近來珍敷 御美談奉伺、今更感泣欣躍之至、誠に社稷之大幸無量、難有奉存候、早速二三之親友へも申聞候処、一同感泣難有奉存候事ニ御坐候、景山老公へも今朝側勤之者より能序御坐候に付、右 御美談、具に言上仕候、嚙

御満悦之御儀と奉恐縮候、扱監察各名封書云々之義ハ、閣御口氣ニハ是迄一度ならず御掛ニ相成候処、銘々心々云々之御意味御坐候に付、即今監府之事情、尚 御深察之御意味被 仰出候に付、亦閣も頗ル御工夫も可被為在旨、是又大幸之至ニ奉存候、なるほど閣御口氣之通り、両度程も御懸ニ相成候由、然ル所、当春頃泄漏等も出来、少シ不都合之説申出候者も御坐候趣承及候得とも、即今ハ中々左様之義ハ有之間敷候、餘程憤発之勢相見申候、前文 御美談市郎兵衛方へハ早速極密ニ通候様周旋仕候、監府よりも多分市郎兵衛・市右衛門・中務少輔・鉄太郎、右四名ニ而封書ハ不遠内出候半敷と推察仕候得共、猶更先方へも亦々篤と周施為仕候方可然敷と奉存候、併右 御美談中之御釣合之

処、夫に而宜敷御坐候哉、尚亦御都合極密に御下知を蒙度奉存候、左候ハ、諸事手筈違等も無之、誠に工合能參可申
敷と奉存候、尤夫等之儀、宜小臣迄之姿に而、泄漏等聊不仕候、不苦御儀ニも御坐候ハ、此段偏に奉希上候、扱小
臣義愈戒慎、尽微力罷在候間、乍恐奉安 尊慮度奉祈候、尚又小臣在府中何等不自由之義も有之候ハ、松・吉岡士
迄可申出旨、蒙 尊命、御懇篤之至極、実以恐多き御儀難有仕合奉存候、先ハ御受旁、右等之趣不顧恐懼奉言上候、
誠恐誠惶頓首々々謹言

陽月四日

小臣 菊池重善 拜

上

① 広尾老上公 広尾は宇和島藩中屋敷、老上公は伊達宗紀。閣下は伊達宗城

② 駒 水戸藩駒込邸。磔 磔川、水戸藩小石川邸。景山 徳川斉昭

③ 景山公眼氣 第十六号代「八四」(嘉永三年六月二十三日)に、宗城から斉昭への眼疾見舞の文章がある。

④ 松 松根図書。吉 吉見長左衛門。ともに宇和島藩士。前々番「一四一」、前番「一四二」

内容 一、小石川・駒込両邸の御安泰。斉昭眼疾も平愈

一、伊達家の諸配慮を謝す

一、十月二日、宗城、阿部老中邸を訪ね、早朝より四ツ時(午前十時)まで会談、斉昭の小石川邸復帰を談ずとのこと、

御邸へ参上し、吉子(吉見)より聞く、感謝の他なし

一、なお極密にし、然るべき筋へ伝達せん

一四四、嘉永三年十二月七日 菊池為三郎書翰、伊達宗城宛

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一六、原本、状

(斜包紙)

上

重善 拜」

乍恐以書付奉言上候、先程者 御懇之御密書被下置、尚又志よふこん氏より御密示之趣縷々被申聞、一々拝承、
難有仕合奉存候、右御受早速可奉言上之所、彼是多忙中、大に延引、不調法至極奉恐怖候、乍遅々左ニ御受奉言上候、
御密示之趣、御尤至極、乍恐 御深慮之御程、奉感服候、然ハ山三実聞之義、兼而是等之儀ハ御承知被為在候御事
とハ奉恐察候得共全く直話之事故、何等之為ニも、一応奉入 高覽置候ハ、又々可然 御深慮を以、何等之一
種ニも相成候ハ、大幸不少候義と愚考之儘、前後も思慮も無御坐候故、更に即今御嫌疑且ツ御周旋被下置候処へ、
付当など心付不申、痴情ニのミ走り、奉言上候段奉恐入候、乍恐 御密諭之云々ニ付、始而其処に心付候義、倉忽
千万、慙愧之至奉畏縮候、当節之世態、実に左も被為在候御儀と、 御深慮之程、深ク奉感服候、右拙記ハ、過日
志よふこん氏より被渡、慥に掌握仕候、扱又即今一大機会不可失時節、尚秘至と周旋可仕旨、縷々 尊示を蒙り、
難有奉畏候、微力にハ御坐候得共、身体統候丈ハ、如何様ニも肝胆粉碎仕候事ニ御坐候、尚更此機会別し而篤く御周
旋も可被下置候との御儀、重畳難有仕合、為社稷無量欣幸此事と奉万祈候、何卒速に 御英断被為在候様、御盡力
被下置度、偏に奉希上候、乍恐今御周旋を以て、事情上達仕候義、是迄に無異候次第、福公にハ、何も能御掌握被為
成、逐々好氣ニ趣候義、邦家之大幸ハ勿論、小臣之面目無此上難有奉仰 高德候、不日恢復之機、発揚も可有御坐
奉渴望候、併茲氣御守殿ニ充滿、全く御守殿ハ姦家之為ニ被奪候姿是のミ痛心難堪候、折角好氣発揚之姿御坐候而も、
皆是より破られ候義不少事と奉存候、乍併是も巨魁之姦除退さへ御坐候得者、無造作身方に相成可申、既に近頃俄に
人見又左衛門等、内藤および鈴木藤吉郎を惡ミ候事、大方ならずと密ニ承りおよび申候、彼知己之者へ内話に、右両

人ハ不遠打落シ為見可申なと物語候趣ニ御坐候、又駒込邸中近侍之者之内ニも、旗色を替候者も御坐候よし、然れ共、元來正路を參らざる者之儀、油断ハ相成不申候得共、是等も乃 尊諭之大機會ニ趣候一端歟と、末頼母敷奉存候、

此機運に 御英断奉萬祈候、

幕後宮之模様内々承候處、姉婦人ハ半信半疑候位之由、其他是に從ふ面々ハ、皆

其通りと相見申候、其内小倉と申御右筆頭取相勤候者、是ハ餘ほと拒候様子ニ相見申候、此小倉、伊藤宗易と無二之

者之よし、左候へハ、伊藤も是迄能程之事申居候と相見得申候、何か才物ら敷者相見候得共、世間ニ評候通り、愈山

氣運遅者と相見申候、併是等之義、彼に響き候而ハ、大害を生し可申、極密奉言上候、右小倉、姉婦人へ悉取入居候

者之よし、是ハ少シク可憂事と奉存候、扱又過日志よふこん氏より奉言上候、福侯儒官云々に付、牧君江御周旋被

下置候ハ、牧君御同道に而、御口出シも御坐候ハ、即今之事情、主君取計ニ都合可然云々、申居候よし、依而奉

言上候處、早速 御聞濟被為遊、尚御周旋も可被下置旨、志よふ子より内々示諭、難有仕合奉存候、右福公儒官

ハ、謹密家之者に而、泄漏大に恐れ候者ニ御坐候間、申上候迄にハ無御坐候得共、此段奉言上候、又近頃礫公御心も

被付候哉、文武等俄に御出精被成候よし、又近侍之者などを被使候處も、以前とハ大ニ替り、御心を被用候御様子ニ

相見候由内承仕候、可賀之第一ニ御坐候、尚又事情能々承り、後も奉言上候、扱又、当朔林伊太郎義兼而御承知も被為

之親友ニ御坐候當中ニおゐて奉拝謁候趣、委細申聞御坐候、当人ハ勿論、小臣ニおゐて難有仕合奉存候、同人申候に、始而

奉謁見候處、當中之儀、前後礼辞、都而相省き候段、恐入候趣、且始而拝謁、餘り心服、腎腸を吐露仕候義、何とか

思召之程奉恐入候得共、外ならぬ 君上と奉存候故之儀、必不惡 思召被下置度、且即日御礼として、御式

台迄も可罷出之處、却而目立候様ニも奉存候間、差扣不罷出候趣、依而小官より宜敷奉言上置御坐候様申出候事ニ

御坐候、前文之段、乍恐御受旁、事情不願恐懼奉言上候

誠恐誠惶、頓首々々、謹言

十二月七日

小臣菊池為三郎

重善（花押）

上

①しよふこん氏、志よう子Ⅱ「松根」、宇和島藩家老松根図書

②人見又左衛門Ⅱ水戸藩士、番頭

③内藤Ⅱ内藤藤一郎業昌

④鈴木藤吉郎

⑤姉婦人Ⅱ姉小路局

⑥小倉

⑦伊藤宗易Ⅱ奥医師伊藤宗益。大奥での人気が高く、阿部老中とも親しく、斉昭とも近づきのあった実力者。

⑧福侯儒官Ⅱ福山藩（阿部正弘）藩校弘道館教授で正弘の侍読、公用人の石川成章（関藤藤陰）であろう、頼山陽門人。

⑨牧君……このところ人名未詳である

⑩林伊太郎Ⅱ嘉永六年より文久二年まで代官、のち学問所頭取となる人物か、名鉄蔵。

内容 一、松根よりの「密示」を謝す

一、「山三実聞」（未詳）の判断

一、この際「御周旋」の機なりと切望す

一、福公（阿部老中）も事情をよく承知ならん

一、御守殿（水戸先々代斉脩夫人、峯寿院）の周辺には「姦人」出入りして、痛心の極み

一、「巨魁之姦」の除去、急務なり

一、人見は近頃は内藤・鈴木藤吉郎と対立

一、駒込邸近侍の中にも態度変身の者あるか

一、大奥にも警戒を要す、とくに姉公路

一、右筆小倉及び伊藤宗易にも警戒すべし

徳川斉昭と伊達宗城（出）——河内

一、福公（阿部老中）儒官にも注意すべし

一、礫公（徳川慶篤）、最近は文武に精進の様子、大いに悦ぶ

一、親友林伊太郎の引立てを謝す

一、御礼として式台まで罷出でたくも遠慮せしとの由

一四五、嘉永三年十二月 老中連署書通二点写、及び同年十二月二十八日 徳川斉昭書翰写

* 宇和島伊達家文書、同前、第三八号一七(1)、状

(1)十二月十四日、閣老衆連名に而駒込老公へ御書通之写

御書拝見仕候、如高論、沍寒甚敷御坐候へとも、上々様益御機嫌能被遊御坐、恐悦被思召候段、御同意奉存上候、^①

随而 尊所様ニも益御清健被成御坐、恭寿之至奉拝賀候、然者、宰相殿御縁組被^② 仰出、且五郎磨方引移前、

登宮種々之御面目無此上御本懷之縷々御紙上之趣、御尤之御事、誠目出度御義不過之奉存候、其節表向御礼ハ被仰上候得者、尚又蒙仰候趣、委曲奉入 高聴候処、御尤之御事ニ被 思召、右様御面目ニ思召候段、甚御満悦被遊候御事共ニて、御念入候段、恐申上候様ニとの御事ニ御坐候、此段御談申上度、如此御坐候、誠恐謹言

十二月十四日

阿部伊勢守

牧野備前守

戸田山城守

松平伊賀守^③

(2)

尚以申上候、寒威追日相募可申、折角御自重被為在候様奉折候、扱御賢息へ追々懸御目、いづれも格別之御様子にて、

誠珍重之御事、御樂之程奉深察候、扱又扱又兼々恩借仕候御一本、同列共拜写相濟候間、奉返壁候、延引ニ及可申上様も無御坐候、幾重ニも御仁恕可被成下候、將又御端并御別紙ニ被仰下候、兼々御内談之条々、于今評議尽兼、意外ニ御請延引仕候處、尚又被仰越候御覺悟之趣相伺候上ハ、此節何とか取計可申之處、不容易次第にて、衆議何分難決、御推察可被成下候通り、逆も急速之御談ハ難仕、雖然御内談之趣、御不尤之事にて、遅々仕次第にも無之、無餘義御事情可有御坐候得共、賢明說得を以、宰相殿御勤、備後以下感服之上、其主たる一両輩転遷之義、於公辺御差支之義ハ無之故、右様取計可致様の御所置無之事ハ、有御坐間敷、何卒御手限にて相濟候様仕度事ニ候、御母子、御父子御和睦云々義ハ、右之御請延引ニ拘り候義ハ更ニ無之、且、兼々御疑惑被成御坐候、御食物之義、有志之者ニ被為対候御場合可有之哉にハ候得共、餘り之御疑惑ニハ無之哉、如何程之奸人にても、本文ニも御承知之通り、近來格別之御持恩を被為蒙、萬端御首尾宜敷、尊所様に対し如何之奸計可仕様も無之、然に只々右御疑惑を被仰立、御守殿之御伺も御疎遠ニ被為在、御父子合迎も格別ニ無之段ハ、真ニ解得兼候次第ニ御坐候、將又有志之輩、萬一御守殿御伺等御差留申上候次第にも候ハ、実ニ賢明を迷し奉る訳に而、奸にも劣たるとも可申敷、何分ニも再三御考慮、至極御穩當之御取計社可然義と、一同申合仕候事ニ御坐候、將又前文御手限に而、一両輩之御取計ハ、素より公辺ニ而御指支も無御坐候得共、若多人數之事ニ相成候てハ、又々御一藩之動静何とも難計候間、御手限に而も容易ニ可然とハ難申上候、萬々御氣長ニ御熟慮被為在候様、呉々所希候、以上

和泉守義ハ旅中ニ付、致除名候、以上

御請

右ハ、去冬中御書翰を以、除奸之義、閑老衆へ老公より御内談御頼に相成候處、其後何等御答不被申上候に付、又々近頃御書中を以御催促ニ相成候處、前書之通り御答ニ相成候趣、極密相伺候、尤一切泄漏等致間敷

旨、別紙御下御坐候間、此段秘々相認候事

(3) 御直書之写(徳川齊昭)

十五日昼、如是申來候にて見候へハ、心底ハ有志に而礫へ行候を留候為かと存候様之趣にて、驚入候、有志ハ毎度母子父子の間近しく致候、申聞候へとも、此節之姿之所へ、萬一之事有之時ハと存候故、我等にて行不申事也、扱右之通り申來候に付てハ、一兩日之中ニ挨拶を可遣、其大意ハ、手限に相濟候様被成度との御事、委曲承り申候、乍然畢竟手限ニ不相成候故、度々は迄御頼申候事ニ候得共、何れにも、公辺より被 仰出兼候ハ、兼而御承知之不正私欲、尚又 幕御達を不用、父子熟議等無之様之扱にて、自然離間ニ相成行候ハ不宜候故、以來左様無之様、別而役人宰相側向等の人ハ大切故、下官へ相談有之、取行候様、夫ニ付候てハ、是迄不正等之役人ハ夫々申付候方可然よし御達ニ致度云々、有志にてハ毎々礫へ行候様申候得共、下官懸念故不参事にて、何とか有志を御疑之様ニも察申候得共、一切左様ニハ無之云々、氣長ニ熟慮云々被仰下候へ共、是迄七ヶ年色々之心配致候へハ、氣短事ニも有之間敷、又々動静云々、御心配之様子ニ候得共、下官立入候へハ、此所ハ御受合申候云々、此趣ニ可申遣心也、中略、夫迄返書遣不申様可申候故、此段申聞後、中略、本文外へハ一切洩れ不申様、度々云々

(下ゲ札) 「中略ノ所ニハ、前文一兩日ノ内ニ挨拶可申をと御坐候處、又々深く御即考之上可被遣、先暫く扣候との意味ニ御坐候」

右ハ、前後共吉次郎へ内密御下ケニ相成候趣、私近在より歸府後承知仕候故、早速何等之為内密可申上置と存居候得共、本文他へハ一切洩れ不申様云々御坐候に付、吉次郎も深く秘し、且一体人之手元へ内々御下ケニ相成事ヲ以、跡も相扣居候、旁暫時延引仕候、尤乍恐 尊藩之御儀ハ、是迄不一方御尽力被下置候御儀ニも被為在、尚又向後萬諸奉他頼候義ニ御坐候得者、何等之為一応内々奉言上置候様仕候云々、吉次郎へ昨今熟談之上、奉入 高覽ニ

(下ゲ札)

事ニ御坐候、恐惶謹言

十二月廿八日

小臣 重善 謹記

①宰相縁組||嘉永三年十一月二十三日、徳川慶篤（宰相、権中納言）と、有栖川宮職仁親王女線姫（幟子、たかこ）との婚約、將軍より許可あり。成婚は嘉永五年十二月十四日。（第十七号内）の「九六」註①参照

②五郎麿||齊昭五男昭徳。嘉永三年五月二十三日急死した鳥取藩主池田慶栄の養嗣子として、同年八月二十五日養嗣子、襲封を命ぜらる。同年十二月十九日元服、慶徳と名のる。（同前「九六」註②参照）

③老中四名||阿部伊勢守正弘（天保十四・閏九・十一—安政四・六・十七卒）

牧野備前守忠雅（天保十四・十一・三—安政四・九・十一免）

戸田山城守忠温（弘化二・三・十八—嘉永四・七・二十七卒）

松平伊賀守忠優（嘉永元・十・十八—安政二・八・四）

他に松平和泉守乗全（嘉永元・十・十八—安政二・八・四）が老中であるが、次の(2)の末尾のように、「旅中」で署名せず

内容

(1)一、徳川慶篤と有栖川宮女との縁組許可、及び五郎麿の鳥取養子入りなどの慶事を悦ぶ

(2)一、徳川慶篤へは何回か会う。末頼もし。

一、兼て拝借の「一本」、同列老中達写取りの後に返却せん

一、齊昭の意見を述べし件、尚評議中、決し難し

一、慶篤の藩政に感服、「一両輩」（水戸家有力者）の転遷（除奸）に幕府として同意

(3)一、阿部老中らの返信、藩の有志の礫（小石川本邸）行き差留めの底意あるか、と驚く。有志等は、母子・父子ともに親しく接せし者共なり。

一、「除奸」につき「手限に相済せ」との内意を了解

一、幕達を受け、父子協議の上、「不正の役人」を処分せん

一、七ヶ年色々と案じ来りしこと故、「氣短か」な処置との心配は無用

一、水戸家父子和睦には、特に疑惑なきようされたし

一、有志の輩の「御守殿」（峯寿院）への接近差留めはよろしからず

一、なお「除奸」については、余り多数とならば一藩の動静にもかゝわらん

一、（為三郎の附記）去年冬中より、「除奸」につき斉昭より阿部老中へ再三内願、返答なし。近頃催促への、「極密」の返答なり

一、先の「内意」も、本書も極密にすべし

一、（為三郎附記）老中と斉昭との密信は、荻信之介へ内密知らされし事なり。なおその秘密は守るべし。

一、（同）荻信之介の了解のもとに、これを伊達宗城に密呈す

附記——なお「補遺」として収めるべきものが何種が残ったので、次回を期す。本稿は、引続いて「昭和五十三・五十四年度文部省科学研究費・総合研究Ⅵ」による研究成果の一部であるが、「昭和六十一年度同・一般研究Ⅵ」（伊達宗城における維新国家構想の研究）の成果にも連結することとなった。

（一九八六・十・七）